

椎本

渋谷栄一訳

第一章 匂宮の物語 春、匂宮、宇治に立ち寄る

「第一段 匂宮、初瀬詣での帰途に宇治に立ち寄る」

二月の二十日ころに、兵部卿宮、初瀬にお参りになる。昔立てた御願のお礼参りであったが、思い立ちにもならないで数年になってしまったのを、宇治の辺りのご休息宿の興味で、大半の理由は出かける気になられたのであろう。恨めしいと言う人もあつた里の名が、総じて慕わしくお思いなされる理由もたわいないことであるよ。上達部がとても大勢お供なさる殿上人などはさらに言うまでもない、世に残る人はほとんどなくお供申した。六条院から伝領して、右の大殿が所有していらつしやる邸は、川の向こうで、たいそう広々と興味深く造つてあるので、ご準備をさせなかつた。大臣も、帰途のお迎えに参るおつもりであつたが、急の御物忌で、嚴重に慎みなさるよう申したというので、参上できない旨のお詫びを申された。

宮は、いささか興をそがれた思いがしたが、宰相中将が、今日のお迎えに参上なさつていたので、かえつて気が楽で、あの辺りの様子も聞き伝えることができようと、ご満足なかつた。大臣には、気楽にお会いしがたく、気のおける方とお思い申し上げていらつしやる。

ご子息の公達の、右大弁、侍従の宰相、権中将、頭少将、蔵人兵衛佐などは、みなお供なさる。帝、后も特別におかわいがり申されていらつしやる宮なので、世間一般のご信望もたいそう限りなく、それ以上に六条院のご縁者方は、次々の人も、みな私的なご主君として、親身にお仕え申し上げていらつしやる。

「第二段 匂宮と八の宮、和歌を詠み交す」

土地に相応しい、ご設営などを興味深く整えて、碁、双六、弾碁の盤類などを取り出して、思い思いに遊びに一日をお過ごしなさる。宮は、お馴れにならない御遠出に、疲れをお感じになつて、ここに泊まるうとのお考えが強いので、ちょっとご休憩なさつて、夕方は、お琴などを取り寄せてお遊びになる。

例によつて、このような世間離れした所は、水の音も引立て役となつて、楽の音色もひときわ澄む気がして、あの聖の宮にも、ただ棹一さしで漕ぎ渡れる距離なので、追い風に乗つて来る響きをお聞きになると、昔の事が自然と思ひ出されて、

「笛がたいそう美しく聞こえてくるなあ。誰であろう。昔の六条院のお笛の音を聞いたのは、それは実に興味深げな愛嬌ある音色にお吹きになつたものだ。これは澄み上つて、大げさな感じが加わつているのは、致仕の大臣のご一族の笛の音に似ているな」などと、独り言をおつしやる。

「ああ、何と昔になつてしまつたことよ。このような遊びもしないで、生きているともいえない状態で過ごしてきた年月が、それでも多く積もつたとは、ふがいないことよ」

などとおつしやる折にも、姫君たちのご様子がもつたいたなく、このような山中に引き止めたままにはしたくないものだ」とついでお思い続けになられる。宰相の君が、同じことなら近い縁者としていたいのだが、そのようには考えるわけには行かないようだ。まして近頃の思慮の浅いような人を、どうして考えられようか」などとお考え悩まれ、所在なく物思いに耽つていらつしやる所は、春の夜もたいへん長く感じられるが、打ち興じていらつしやる旅寝の宿は、酔いの紛れにとても早く夜が明けてしまふ気がして、物足りなく帰ることを、宮はお思ひになる。

はるばると霞わたつて空に、散る桜があると思うと今咲き始めるのなどもあり、色とりどりに見渡されるところに、川沿いの柳が風に起き臥し靡いて水に映つている影などが、並々ならず美しいので、見慣れない方は、たいそう珍しく見捨てがたいとお思ひになる。

宰相は、「このような機会を逃さず、あの宮に伺いたい」とお思いになるが、大勢の人目を避けて独り舟を漕ぎ出しなさるのも軽率ではないか」と躊躇していらつしやるところに、あちらからお手紙がある。

「山風に乗って霞を吹き分ける笛の音は聞こえますが、隔てて見えますそちらの白波です」

草仮名でたいそう美しくお書きになっていた。宮、「ご関心の所からの」と御覧になると、たいそう興味深くお思いになって、「このお返事はわたしがしよつ」と言つて、

「そちらとこちらとの汀に波は隔てていても、やはり吹き通いなさい宇治の川風よ」

「第三段 薫、迎えに八の宮邸に来る」

中将はお伺いなさる。遊びに夢中になつてゐる公達を誘つて、棹さしてお渡りになるとき、「酣酔楽」を合奏して、水に臨んだ廊に造りつけてある階段の趣向などは、その方面ではたいそう風流で、由緒ある宮邸なので、人びとは気をつけて舟からお下りになる。

ここはまた、趣が違つて、山里めいた網代屏風などで、格別に簡略にして、風雅なお部屋のしつらいを、そのような気持ちで掃除し、たいそう心づかいて整えていらつしやうた。昔の、楽の音などまことにまたとない弦楽器類を、特別に用意したようにはなく、次々と弾き出しなつて、音越調に変えて、「桜人」を演奏なさる。

主人の宮の、お琴をこのような機会にと、人びとはお思いになるが、箏の琴を、さりげなく、時々掻き鳴らしなさる。耳馴れないせいであろうか、「たいそう趣深く素晴らしい」と若い人たちは感じ入つていた。

土地柄に相応しい饗応を、たいそう風流になつて、はたから想像していた以上に、かすかに皇族の血筋を引くといった素性卑しからぬ人びとが大勢、王族で、四位の年とつた人たちが、このように大勢客人が見える時にはと、以前からご同情申し上げていたせいも、適当な方々が皆参上し合つて、瓶子を取る人もござつぱりして、それはそれとして古風で、「風雅にお持てなしなつた。客人たちは、宮の姫君たちが住んでいらつしや

るご様子、想像しながら、関心を持つ人もいるであろう。

「第四段 匂宮と中の君、和歌を詠み交す」

あの宮は、それ以上に気軽に動けないご身分までをも、窮屈にお思いであるが、せめてこのような機会にでもと、たまらなくお思いになつて、美しい花の枝を折らせなつて、お供に控えている殿上童でかわいい子を使いにして差し上げなさる。

「山桜が美しく咲いている辺りにやつて来て、同じこの地の美しい桜を挿頭に手折つたことです。野が睦まじいので」

とてもあつたのであつたか。「お返事は、とてもできない」などと、差し上げて憎らしいことでもございます。

「このような時のお返事は、特別なふうにご考えて、時間をかけ過ぎるのも、かなど、老女房たちが申し上げるので、中の君にお書かせ申し上げなされる。」

「挿頭の花を手折るついでに、山里の家は、通り過ぎてしまふ春の旅人なのでしょう。わざわざ野を分けてまでもありますまい」

と、たいそう美しく、上手にお書きになつていた。なるほど、川風も隔て心をおかずに吹き通う楽の音を、面白く合奏なさる。お迎えに、藤大納言が、勅命によつて参上なつた。人びとが大勢参集して、何かと騒がしくして先を争つてお帰りになる。若い人たちは、物足りなく、ついつい後を振り返つてばかりいた。宮は、「また何かの機会に」とお思いになる。

花盛りで、四方の霞も眺めやる見所があるので、漢詩や和歌も、作品が多く作られたが、わずらわしいので詳しく尋ねもしないのである。

何かと騒々しくて、思うようにも意を尽くして言いやることもできずじまいだつたことを、残念に宮はお思いになつて、手引なしでもお手紙は常にあるのだつた。宮も、

「やはり、お返事は差し上げなさい。ことさら懸想文のようには扱つまい。かえつて心をときめかさせることになつてしまひましよう。たいそう好色の

親王なので、このような姫がいる、とお聞きになると、放っておけないと思っただけの戯れ事なのでしょう。」

と、お促しなされる時々、中の君がお返事申し上げなされる。姫君は、このよ
うなことは、冗談事にもご関心のないご思慮深さである。

いつとなく心細いご様子で、春の日長の所在なさは、ますます過ごしが
たく物思いに耽つていらつしやる。ご成長なさつたご容姿器量も、ますま
す優れ、申し分なく美しいのにつけても、かえつておいたわしく、不器量
であつたら、もつたいなく、惜しいなどの思いは少なかったらうに」など
と、明け暮れお悩みになる。

姉君は二十五歳、中の君は二十三歳におなりであつた。

「第五段 八の宮、娘たちへの心配」

宮は、重く身を慎むべきお年なのであつた。何となく心細くお思いになつ
て、ご勤行を例年よりも弛みなくなされる。この世に執着なさつていないの
で、死出の旅立ちの用意ばかりをお考えなので、極楽往生も間違いないお
方だが、ただこの姫君たちの事に、たいそうお気の毒で、この上ない道心の
強さだが、かならず、今が最期とお見捨てなされる時のお気持ち、きつと
乱れるだろう」と、拜する女房もご推察申し上げるが、お思いの通りでは
なくても、並に、それでも人聞きの悪くなく、世間から認めてもらえる身
分の人で、真実に後見申し上げよう、などと、思つてくれる方がいたら、知
らぬ顔をして黙認しよう、一人一人が人並みに結婚する縁があつたら、そ
の人に譲つて安心もできようが、そこまで深い心で言い寄る人はいない。

時たまちよつとしたきつかけで、懸想めいたことを言う人は、まだ年若
い人の遊び心で、物詣での中宿りや、その往来の慰み事に、それらしいこ
とを言つても、やはり、このように落ちぶれた様子などを想像して、軽ん
じて扱うのは、心外なので、なおざりの返事をさえおさせにならない。三
の宮は、やはりお会いしないではいられないとお思いが深いのであつた。
前世からの約束事でしたのであろうか。

第二章 薫の物語 秋、八の宮死去す

「第一段 秋、薫、中納言に昇進し、宇治を訪問」

宰相中将は、その年の秋に、中納言におなりになった。ますますご立派
におなりになる。公務が多忙になるにつけても、お悩みになることが多かつ
た。どのような事かと、気がかりに思い続けてきた往年よりも、おいたわ
しくお亡くなりになつたという故人の様子が思いやられるので、罪障が軽
くおなりになる程の、勤行もしたく思う。あの老女をもお気の毒な人とお
思ひになつて、目立つてではなく、何かと紛らわし紛らわししては、好意
を寄せお見舞いなされる。

宇治に参らず久しくなつてしまつたのを、思い出してご訪問なさつた。七
月ごろになつてしまつたのだ。都ではまだ訪れない秋の気配を、音羽山近
くの、風の音もたいそう冷やかで、槇の山辺もわずかに色づき初めて、や
はり山路に入ると、趣深く珍しく思われるが、宮はそれ以上に、いつもよ
りお待ち喜び申し上げなさつて、今回は、心細そうな話を、たいそう多く
申し上げなされる。

「亡くなつた後、この姫君たちを、何かの機会にはお尋ね下さり、お見捨て
にならない中にお数え下さい」
などと、意中をそれとなく申し上げなされると、

「一言なりとも先に承つておりましたので、決して疎かには致しません。現
世に執着しまいと、係累を持たないであります身なので、何事も頼りがい
のなく将来性のない身でございますが、そのようなふうでも生き永ら
えておりますうちは、変わらない気持ちで御覧になつていただこうと存じ
ます」

などと申し上げなされると、嬉しくお思いになった。

「第二段 薫、八の宮と昔語りをする」

まだ夜明けには遠い月が明るく差し出して、山の端が近い感じがするの

で、念誦をたいそうしみじみと唱えなさつて、昔話をなさる。

「最近の世の中は、どのようになつたのでしょうか。宮中などでは、このよ
うな秋の月の夜に、御前での管弦の御遊の時に伺候する人達の中で、楽器
の名人と思われる人びとばかりが、それぞれ得意の楽器を合奏しあつた調
子などは、仰々しいのよりも、嗜みがあると評判の女御、更衣の御局々が、
それぞれは張り合つていて、表面的な付き合ひはしているようで、夜更け
たころの辺りが静まつた時分に、悩み深い風情に掻き調べ、かすかに流れ
出た楽の音色などが、聞きどころのあるのが多かつたな。」

何事につけても、女性というのは、慰み事の相手にちよつとよく、何とな
く頼りないものの、人の心を動かす種であるのでしょうか。それだから、罪
が深いのでしょうか。子を思う道の闇を思いやるにも、男の子は、それほ
ども親の心を乱さないのであるうか。女の子は、運命があつて、何とも言い
ようがないと諦めてしまつたような場合でも、やはり、とても気にかかるも
ののようです。」

などと、一般論としておっしゃるが、どうしてそのようにお思いになら
ないことがあるうか、おいたわしく推察される宮の心中である。

「すべて、ほんとうに、先程申し上げましたようにすべてこの世の事は執着
を捨ててしまつたせいでしょうか、自分自身のこととは、どのようなことも
深く分かりませんが、なるほどつまらないことですが、音楽を愛する心だ
けは、捨てることができせん。賢く修業する迦葉も、そうですから、立つ
て舞つたのでございませう。」

などと申し上げて、名残惜しく聞いたお琴の音を、切にご希望なさるの
で、親しくなるきつかけにでもとお思いになつてか、ご自身はあちらにお
入りになつて、切にお勧め申し上げなさる。箏の琴を、とてもかすかに掻
き鳴らしてお止めになつた。常にもまして人の気配もなくひっそりとし
しみじみとした空の様子、場所柄から、ことさらでない音楽の遊びが心に
しみて興味深く思われるが、気を許してどうして合奏なさるうか。

「自然とこれくらい引き合させた後は、若い者同士にお任せ申そう。」
と言つて、宮は仏の御前にお入りになつた。

「わたしが亡くなつて草の庵が荒れてしまつても、の一言の約束だけは守つ
てくれようと存じます。このようにお目にかかることも今回が最後になる

だろうと、何となく心細いのに堪えかねて、愚かなことを多くも言つてし
まつたな。」

と言つて、お泣きになる。客人は、
「どのような世になりましても訪れなくなることはありません。この末長く
約束を結びました草の庵には、相撲など、公務に忙しいところが過ぎました
ら、伺いませう。」
などと申し上げなさる。

「第三段 薫、弁の君から昔語りを聞き、帰京」

こちらで、あの問はず語りの老女を召し出して、残りの多い話などをお
させになる。入方の月が、すっかり明るく差し込んで、透影が優美なので、
姫君たちも奥まつた所にいらつしやる。世の常の懸想人のようではなく、思
慮深くお話を静かに申し上げていらつしやるので、しかるべきお返事など
を申し上げなさる。

三の宮が、「たいそうご執心でいられる」と、心中には思い出しながら、
自分ながら、やはり普通の人とは違つているぞ。あれほど宮ご自身がお許
しになることを、それほどにも急ぐ気にもなれないことよ。が、結婚など思
いもよらないことなどは、さすがに思われぬ。このようにして言葉を交
わし、季節折々の花や紅葉につけて、感情や情趣を通じ合うのに、憎からず
感じられる方であらうしやるので、自分と縁がなく、他人と結婚なさるの
は、やはり残念なことだろうと、自分のもののような気がするのであつた。
まだ夜明けに問のあるうちにお帰りになつた。心細く先も長くなさそう
にお思いになつたご様子を、お思い出し申し上げながら、忙しい時期を過
ごしてから伺おう」とお思いになる。兵部卿宮も、今年の秋のころに紅葉
を見にいらつしやうと、適当な機会をお考えになる。

お手紙は、絶えず差し上げなさる。女は、本気でお考えになつてい
るのだからとお思いでないので、厄介にも思わず、何気ない態度で、時々こ
文通なさる。

「第四段 八の宮、姫君たちに訓戒して山に入る」

秋が深まって行くにつれて、宮は、ひどく何となく心細くお感じになつたので、いつものように、静かな場所で、念仏を専心に行おう」とお思いになつて、姫君たちにもしかるべきことを申し上げなされる。

「この世の習いとして、永遠の別れは避けられないもののようにだが、気の慰まるようなことがあれば、悲しさも薄らぐものですよ。また後事を託せる人もなく、心細いご様子の二人を、うち捨てて行くことがまことに辛い。けれども、その程度のことでは妨げられて、無明長夜の闇にまで迷うのは無益なことだ。一方でお世話して来た今でさえ執着を断ち切つていたのだから、亡くなつた後のことは、知ることはできないものであるが、私一人だけのためではなく、お亡くなりになつた母君の面目をもつぶさぬよう、軽率な考えをなさいますな。

しつかりと頼りになる人以外には、相手の言葉に従つて、この山里を離れなされるな。ただ、このように世間の人と違つた運命の身とお思いになつて、ここで一生を終わるのだとお悟りなさい。一途にその気になれば、何事もなく過ぎてしまふ歲月なのである。まして、女性は、女らしくひっそりと閉じ籠もつて、ひどくみつともない、世間からの非難を受けないのがよいでしょう」

などとおっしゃる。どうなるかの将来の身の上のありようまでは、お考えも及ばず、ただ、どのようにして、先立たれ申して後は、この世に片時も生きていられようか」とお思いになると、このように心細い状態を前もつておっしゃるので、何とも言いようもないお二方の嘆きである。心の中でこそ執着をお捨てになつていらしたようであるが、明け暮れお側に馴れ親しみなさつて、急に別れなされるのは、冷淡な心からではないが、なるほど恨めしいに違いないご様子だつたのである。

明日、ご入山なされるといふ日は、いつもと違つて、あちらこちらと、邸内を歩きなされて御覧になる。たいそう頼りなく、飯の宿としてお過ごしになつたお住まいの様子を、亡くなつた後、どのようにして、若い姫君たちが絶え籠もつてお過ごしになれようか」と、涙ぐみながら念誦なされる様子は、たいそう清らかである。

年配の女房たちを召し出して、

「心配のないようにお仕えしなさい。何事も、もともと気がねなく暮らして世間に噂にならないような身分の人は、子孫の零落することもよくあることで、目立ちもしないようだ。このような身分になると、世間の人は何とも思わないだろうが、みじめな有様で流浪するのは、至尊の血筋に生まれられた宿縁に対して不面目で、心苦しいことが、多いだろう。物寂しく心細い世の中を送ることは、世の常である。

生まれた家の格式、しきたり通りに身を処するというのが、人聞きにも自分の気持ちとしても、間違いないように思われるだろう。警沢な人並みの生活をしようと望んでも、その思う通りにならない時勢であつたら、決して決して軽々しく、良くない男をお取り持ち申すな」

などとおっしゃる。

まだ夜の明けないうちにお出になるうとして、こちらにお渡りになつて、留守の間、心細くお嘆きなされるな。気持ちだけは明るく持つて音楽の遊びなどはなさい。何事も思うに適わない世の中だ。深刻に思い詰めなされるな」などと、振り返りながらお出になつた。お二方は、ますます心細く物思いに閉ざされて、寝ても起きても語り合いながら、

「どちらか一方がいなくなつたら、どのようにして暮らしていけましようか」「今は、将来もはつきりしないこの世で、もし別れるようなことがあつたら」などと、泣いたり笑つたりしながら、冗談も真実も、同じ気持ちで慰め合いながらお過ごしになる。

「第五段 八月二十日、八の宮、山寺で死去」

あの勤行なされる念仏三昧は、今日終わることだろうと、今か今かとお待ち申し上げていらつしやる夕暮に、使者が参つて、

「今朝から、気分が悪くなつて、参ることができない。風邪かと思つて、あれこれと手当てしているところです。それにしても、いつもよりお目にかかりたいのだが」

と申し上げなされていた。胸がどきりとして、どのようなことかとお嘆きになり、御法衣類に綿を厚くして、急いで準備させなされて、お届け

申し上げなされる。「二、三日良くおなりにならない。」どのようですか、どのようですか」と、使者を差し向けなされるが、

「特にひどく悪いといつのではない。どことなく苦しいのです。もう少し良くなつたら、じきに、我慢してでも帰らう」

などと、口上で申し上げなされる。阿闍梨がびつたりと付き添つてお世話申し上げているのであつた。

「ちょっとしたご病氣と見えるが、最期でいらつしやるかも知れない。姫君たちのご将来の事は、何のお嘆きになることがありましようか。人は皆、それぞれ運命というものは別々なので、ご心配なさつても何にもなりません」と、ますます出離なさらねばならないことを申し上げ知らせながら、いまさら下山なさいますな」と、ご忠告申し上げるのであつた。

八月二十日のころであつた。ただでさえ空の様子のひとつきわ物悲しいころ、姫君たちは、朝夕の、霧の晴間もなく、お嘆きになりながら物思いに沈んでいらつしやる。有明の月がたいそう明るく差し出して、川の表面もはつきりと澄んでいるのを、そちらの部を上げさせて、お覗きになつていらつしやる。鐘の音がすかすかに響いて来て、夜が明けたようだ」と申し上げるころに、人びとが来て、

「この夜半頃に、お亡くなりになりました」

と泣く泣く申し上げる。心に懸けて、どうしていられるかと絶えずご心配申し上げていらつしやるが、突然お聞きになつて、驚いて真暗な気持ちになつて、ますますこのようなことには、涙もどこに行つておしまひになつたのであろうか、ただうつ伏していらつしやる。

悲しい死別といつても、目の当たりに立ち会つてはつきり見届けるのが、世の常のことであるが、どのような最期であつたのかの心残りも添わつてお嘆きになることは、もつともなことである。片時の間でも、先立たれ申しては、この世に生きていられようとは考えていらつしやるなかつたお二方なので、是非とも後を追いたいと泣き沈んでいらつしやるが、寿命の定まつた運命のある死出の旅路だつたので、何の効もない。

「第六段 阿闍梨による法事と薫の弔問」

阿闍梨は、長年お約束なさつていたことに従つて、後のご法事も万事にお世話致す。

「亡き人におなりになつてしまわれたというお姿ご様子だけでも、もう一度拝見したい」

とお考えになりおつしやるが、

「いまさら、どうしてそのような必要がございますようか。この日頃も、お会いしてはならないとお諭し申し上げていたので、今はそれ以上に、お互いにご執心なさつてはいけないとお心構えを、お知りになるべきです」とだけ申し上げます。山籠もりしていらつしやるた時のご様子をお聞きになるにつけても、阿闍梨のあまりに悟り澄ました聖心を、憎く辛いとお思いになるのであつた。

出家のご本願は、昔から深くいらつしやるが、このように見譲る人もない姫君たちのご将来の見捨てがたいことを、生きている間は明け暮れ離れずに面倒を見て上げるのを、本当に侘しい暮らしの慰めとも、お思ひになつて離れがたく過ごしていらしたのだが、限りある運命の道には、先立ちなされる心配も後を慕いなされるお心も、思うにまかせないことであつた。

中納言殿におかれては、お耳になさつて、まことにあつけなく残念に、もう一度、ゆつくりとお話申し上げたいことがたくさん残つている気がして、人の世の無常が思い続けられて、ひどくお泣きになる。再びお目にかかることは難しいだろうか、などとおつしやるが、やはりいつものお心にも、朝夕の隔ても当てにならない世のはかなさを、誰よりも殊にお感じになつていたので、耳馴れて、昨日今日とは思わなかつたが、繰り返し繰り返し諦め切れず悲しくお思ひなされる。

阿闍梨のもとにも、姫君たちのご弔問も、心をこめて差し上げなされる。このようなご弔問など、また他に誰も訪れる人さえないご様子なのは、悲しみにくれている姫君たちにも、年来のご厚誼のありがたかつたことをお分かりになる。

「世間普通の死別でさえ、その当座は、比類なく悲しいようにはかり、誰でも悲しみにくれるようなのに、まして気を慰めようもないお身の上では、どのようにお悲しみになつていられるだろう」と想像なさりながら、後のご法事など、しなければならぬことを想像して、阿闍梨にも挨拶なされる。こ

ちらにも、老女たちにかこつけて、御誦経などのことを「配慮なさる。

第三章 宇治の姉妹の物語 晩秋の傷心の姫君たち

「第一段 九月、忌中の姫君たち」

夜の明けない心地のまま、九月になった。野山の様子、まして時雨が涙を誘いがちで、ややもすれば先を争って落ちる木の葉の音も、水の響きも、涙の滝も、一緒のように分からなくなつて、「こうしては、どうして、定めのあるご寿命も、しばらくの間もお保ちになれようか」と、お仕えする女房たちは、心細く、ひどくお慰め申し上げ、お慰め申し上げしつゝ。

こちらにも念仏の僧が伺候して、故宮のいらした部屋は、仏像を形見と拝し上げながら、時々参上してお仕えしていた者たちで、御忌に籠もつている人びとは皆、しみじみと勤行して過す。

兵部卿宮からも、度々ご申問申し上げなさる。そのようなお返事など、差し上げる気もなさらない。何の返事もないので、中納言にはこうではないだろうに、自分をやはり疎んじていらつしやるらしい」と、恨めしくお思ひになる。紅葉の盛りに、詩文などを作らせなさるうとして、お出かけになるご予定だったが、こうしたことになつて、この近辺のご逍遙は、都合な折なので中止なさつて、残念に思つていらつしやる。

「第二段 匂宮からの申問の手紙」

御忌中も終わった。限りがあるので、涙も絶え間があるうかとお思ひやりになつて、とてもたくさんお書き綴りなさつた。時雨がちの夕方、

「牡鹿の鳴く秋の山里はいかがお暮らしようか。小萩に露のかかる夕暮時は、ちょうど今の空の様子、ご存知ないふりをなさるのでしたら、あまりにひどいことでございます。枯れて行く野辺も、特別のものとして眺められるころでございます。」

などである。

「おししやるとあり、とても情け知らずの有様で、何度にもなつてしまひましたから、やはり、差し上げなさい」

などと、中の宮を、いつものように、催促してお書かせ申し上げなさる。「今日まで生き永らえて、硯などを身近に引き寄せて使おうなどと思つたらうか。情けなくも過ぎてしまつた日数だわ」とお思ひになると、また涙に曇り、何も見えない気がなさるので、硯を押しやつて、

「やはり、書くことはできませんわ。だんだんこのように起きてはいられますが、なるほど、限りがあるのだわと思われますのも、疎ましく情けなくて」と、可憐な様子で泣きしおれていらつしやるのも、まことにいたいたしい夕暮のころに出立したお使いが、宵が少し過ぎたころに着いた。どうして、帰参することができましよう。今夜は泊まつて行くように」と言わせなさるが、すぐ引き返して、帰参します」と急ぐので、お気の毒で、自分は冷静に落ち着いていらつしやるのではないが、見るに見かねなさつて、涙ばかりで霧に塞がっている山里は、籬に鹿が声を揃えて鳴いております。黒い紙に、夜のため墨つきもはつきりしないので、体裁を整えることもなく、筆に任せて書いて、そのまま包んでお渡しになつた。

「第三段 匂宮の使者、帰邸」

お使いは、木幡の山の辺りも、雨降りでも恐ろしそだが、そのような物怖じしないような者をお選びになつたのであろうか、気味悪そうな笹の蔭を、馬を止める間もなく早めて、わずかの時間に参り着いた。宮の御前においても、ひどく濡れて参つたので、祿を賜る。

以前に見たのとは違つた筆跡で、もう少し大人びていて、風情ある書き方などを、どちららの姫君が書いたものだろうか」と、下にも置かず御覧になりながら、すぐにもお寝みにならないので、

「待つとおしやつて、起きていらして」

「また御覧になることの長いことは、どれほどご執心なのでしょう」

と、御前に仕える女房たちは、ささやき申して、お妬み申し上げます。眠たいからなのであろう。

まだ朝霧の深い明け方に、急いで起きて手紙を差し上げなさる。

「朝霧に友を見失つた鹿の声を、ただ世間並にしみじみと悲しく聞いており
ましようか。一緒に鳴く声には負けません」

とあるが、あまりに風情を知りすぎるようなのも厄介だ。お一方のお蔭
に隠れていられたのを頼み所として、何事も安心して過ごしていた。思い
もかけず長生きして、不本意な間違ひ事が、少しでも起こつたら、気がかり
でならないようにお考えであつた亡きみ魂にまで、瑕をおつけ申すことに
なるう」と、何事にも引つ込み思案に恐れて、お返事申し上げなさらない。
この宮などを、軽薄な世間並の男性とはお思い申し上げていらつしや
らない。何でもない走り書きなさつたご筆跡や言葉遣いも、風情があり優美
でいらつしやるご様子を、多くはご存知でないが、御覧になりながら、そ
の嗜み深く風情あるお手紙に、お返事申し上げるのも、似合わしくない二
人の身の上なので、いつそ、ただ、このような山里人めいて過ごそう」と
お思いになる。

「第四段 薫、宇治を訪問」

中納言殿へのお返事だけは、あちらからも誠意あるように手紙を差し上
げなさるので、こちらからも、よそよそしくなくお返事申し上げなさる。ご
忌中が終わつても、自分自身でお伺いなさつた。東の廂の下がつた所に喪
服でいらつしやるところに、近く立ち寄りなつて、老女を召し出した。

闇に閉ざされていらつしやるお側近くに、たいそう眩しいばかりの美し
さに満ちてお入りになつたので、恥ずかしくなつて、お返事などでさえも
おできになれないので、

「このようには、お扱い下さらないで、故宮のご意向にお従ひ申されるのが、
お話を承る効があるというものです。風流に気取つた振る舞いには馴れて
いませんので、人を介して申し上げますのは、言葉が続きます」

と言つので、

「思ひのほか、今日まで生き永らえておりますようですが、思ひ覚まそう
にも覚ましようもない夢の中にいるように思われまして、心ならず空の光
を見ますのも遠慮されて、端近くに出ることもできません」

と申し上げなさつてゐるので、

「おつしやることといへば、この上ないご思慮の深さです。月日の光は、ご
自身その氣になつて晴れ晴れしく振る舞いなさるならば、罪にもなりましょ
う。どうしてよいか分からず、氣持ちが晴れません。またお悩みを、少し
でも、お晴らし申し上げたく思います」

と申し上げなさると、

「ほんとうですこと。まことに例のないようなご愁傷を、お慰め申し上げな
さるお氣持ちも並一通りでないこと」などと、お諭し申し上げます。

「第五段 薫、大君と和歌を詠み交す」

お氣持ちも、そうはいつでも、だんだんと落ち着いて、いろいろと分別
がおつきになつたので、亡き父宮への厚志からも、こんなにまで遙か遠い
野辺を分け入つていらしたご誠意なども、お分りになつたのであろう、少
しいざり寄りなつた。

お嘆きのご心中、またお約束なつたことなどを、たいそう親密に優し
く言つて、嫌な粗野な態度などはお現しにならない方なので、氣味悪く居
心地悪くなどはないが、関係ない人にこのように声をお聞かせ申し、何と
なく頼りにしていたことなどもあつた日頃を思い出すのも、やはり辛くて、
遠慮されるが、かすかに一言などお返事申し上げなさる様子が、なるほど、
いろいろと悲しみにぼうつとした感じなので、まことにお氣の毒にとお聞
き申し上げなさる。

黒い几帳の透影が、たいそういたいたしげなので、ましてどれほどのご
悲嘆でいられるかと、かすかに御覧になつた明け方などが思い出されて、

「色の変わった浅茅を見るにつけても墨染に、身をやつしていらつしやるお
姿をお察しいたします」

と、独り言のようにおつしやる、

「喪服に色の変わった袖に露はおいていますが、わが身はまつたく置き所も
ありません。ほつれる糸は涙に」

と下は言いさして、たいそうひどく堪えがたい様子でお入りになつてし
まつたようである。

「第六段 薫、弁の君と語る」

引き止めてよい場合でもないのです、心残りにいたわしくお思いになる。老女が、とんでもないご代役に出て来て、昔や今のあれこれと、悲しいお話を申し上げる。世にも稀な驚くべきことの数々を見て来た人だったので、このようにみすばらしく落ちぶれた人と見限らず、たいそう優しくお相手なさる。

「幼かったころに、故院に先立たれ申して、ひどく悲しい世の中だと、悟ってしまつたので、成長して行く年齢とともに、官位や、世の中の栄花も、何とも思いません。」

ただ、このように静かなご生活などが、心にお適いになつていらつしやつたが、このようにあつけなく先立ち申されたので、ますますひどく、無常の世の中が思い知らされる心も、催されたが、おいたわしい境遇で、後に遣されたお二方の事が、妨げだなどと申し上げるようなのは、懸想めいたように聞こえますが、生き永らえても、あの遺言を違えずに、相談申し上げ承りたく思います。

実は、思いがけない昔話を聞いてからは、ますますこの世に跡を残そうなどとは思われなくなつたのですよ」

泣きながらおつしやるので、この老女はそれ以上にひどく泣いて、何とも申し上げることができない。ご様子などが、まるであの方そっくりに思われなさるので、長年来忘れていた昔の事までを重ね合わせて、申し上げようもなく、涙にくれていた。

この人は、あの大納言の御乳母子で、父親は、この姫君たちの母北の方の叔父で、左中弁で亡くなつた人の子であつた。長年、遠い国に流浪して母君もお亡くなりになつて後、あちらの殿には疎遠になり、この宮邸で、引き取つておいて下さつたのであつた。人柄も格別というわけがなく、宮仕え馴れもしていたが、気の利かない者でないと宮もお思いになつて、姫君たちのご後見役のようになさつていたのであつた。

昔の事は、長年このように朝夕に押し馴れて、隔意なく全部思い申し上げる姫君たちにも、一言も申し上げたこともなく、隠して来たけれど、中納言の君は、老人の問はず語りは、皆、通例のことなので、誰彼なく軽率

に言いふらしたりしないにしても、まことに気のおける姫君たちは、ご存知でいらつしやるだろう」と自然と推量されるのが、忌まわしいとも困つた事とも思われるので、「また疎遠にはおけない」と、言い寄るきつかけにもなるのであろう。

「第七段 薫、日暮れて帰京」

今は泊まるのも落ち着かない気がして、お帰りなさるにも、「これが最後か」などとおつしやつたが、「どうして、そのようなことがあるのか、と信頼して、再び押しなかつた、秋は変わったろうか。多くの日数も経ていないのに、どこにいらしたのかも分からず、あつけないことだ。格別に普通の人のようなご装飾もなく、とても簡略になさつていたようだが、まことにどことなく清らかに手入れがあつて、周囲が趣深くなさつていたお住まいも、大徳たちが出入りし、あちら側とこちら側と隔てなかつて、御念誦の道具類なども変わらない様子であるが、仏像は皆あちらのお寺にお移し申そうとする」と申し上げるのを、お聞きなさるにつけても、このような様子の人影などまでが見えなくなつてしまつた時、後に残つてお悲しみになつてお二方の気持ちを推察申し上げなさるのも、まことに胸が痛く思い続けられずにはいらつしやれない。

「たいそう暮れました」と申し上げるので、物思いを中断してお立ちなさると、雁が鳴いて飛んで渡つて行く。

「秋霧の晴れない雲居でさらけにいつそうこの世を飯の世だと鳴いて知らせるのだろう」

「第八段 姫君たちの傷心」

兵部卿宮に対面なさる時は、まずこの姫君たちの御事を話題になさる。今はそうはいつても気がなまるまい」とお思いになつて、宮は、熱心に手紙を差し上げなさるのであつた。ちよつとしたお返事も、申し上げにくく気後れする方だと、女方はお思いになつていた。

「世間にとてもたいそう風流でいらつしやるお名前が広がって、好ましく優美にお思いなさるらしいが、このようにとて埋もれた葎の下のようなところから差し出すお返事を、まことに場違いな感じがして、古めかしいだろつ」などとふさいでいらつしやつた。

「それにしても、思ひのほかに過ぎ行くものは、月日ですわ。このように、頼りにしにくかつたご寿命を、昨日今日とも思はず、ただ人生の大方の無常のはかなさばかりを、毎日のこととして見聞きしてきましたが、自分も父宮も後に遺されたり先立つたりすることに月日の隔たりがあるろつか、などと思つていましたたよ」

「過去を思い続けても、何の頼りがいのありそうな世でもなかつたが、ただいつのまにかのんびりと眺め過ごして来て、何の恐ろしい目にも気がねすることもなく過ごして来ましたが、風の音も荒々しく、いつもは見かけない人の姿が、連れ立つて案内を乞うと、まっさきに胸がどきりとして、何となく恐ろしく侘しく思われることまでが加わつたのが、ひどく堪え難いことですわ」

と、お二方で語り合いながら、涙の乾く間もなく過ごしていらつしやるうちに、年も暮れてしまった。

第四章 宇治の姉妹の物語 歳末の宇治の姫君たち

「第一段 歳末の宇治の姫君たち」

雪や霰が降りしくころは、どこもこのような風の音であるが、今初めて決心して入つた山住み生活のような心地がなさる。女房たちなどは、

「ああ、新しい年がやってきます。心細く悲しいこと。年の改まつた春を待ちたいわ」

と、気を落とさずに言つ者もいる。「難しいことだわ」とお聞きになる。

向かいの山でも、季節季節の御念仏に籠もりなつた縁故で、人も行き来していたが、阿闍梨も、いかがですかと、一通りはたまにお見舞いを申し上げはしても、今では何の用事でちよつとも参ろつつか。

ますます人目も絶え果てたのも、そのようなことは思いながらも、まことに悲しい。何とも思えなかつた山賤も、宮がお亡くなりになつて後は、たまに覗きに参る者は、珍しく思われなさる。この季節の事とて、薪や、木の実を拾つて参る山賤どももいる。

阿闍梨の庵室から、炭などのような物を献上すると言つて、
「長年馴れました宮仕えが、今年を最後として絶えてしまつのが、心細く思われますので」

と申し上げていた。必ず冬籠もり用の山風を防ぐための綿衣などを贈つていたのを、お思い出しになつてお遣りになる。法師たち、童などが山に上つて行くのが、見えたり隠れたり、たいそう雪が深いのを、泣く泣く立ち出してお見送りなさる。

「お髪などを下ろしなかつたが、そのようなお姿でも生きていて下さつたら、このように通つて参る人も、自然と多かつたでしょうに」

「どんなに寂しく心細くても、お目にかかれなこともなかつたでしょうに」などと、語り合つていらつしやる。

「父上がお亡くなりになつて岩の険しい山道も絶えてしまつた今、松の雪を何と御覧になりますか」

中の宮、

「奥山の松葉に積もる雪とでも、亡くなつた父上を思うことができたらうれしゅうございます」

うらやましくいことに、消えてもまた雪は降り積もることよ。

「第二段 薫、歳末に宇治を訪問」

中納言の君は、「新年は、少しも訪問することができないだらう」とお思いになつていらつしやつた。雪もたいそう多い上に、普通の身分の人でさえ見えなくなつてしまつたので、並々ならぬ立派な姿をして、気軽に訪ねて来られたお気持ち、浅からず思い知られなさるので、いつもよりは心をこめて、ご座所などをお設けさせなさる。

服喪者用でない御火桶を、部屋奥にあるのを取り出して、塵をかき払いなどするにつけても、父宮がお待ち喜び申し上げていたご様子などを、女

房たちもお噂申し上げる。直接お話なさることは、気の引けることとばかりお思いになっていたが、好意を無にするように思つていらつしやるので、仕方のないことと思つて、応対申し上げなさる。

氣を許すというのではないが、以前よりは少し言葉数多く、ものをあつしやる様子が、たいそうそつがなく、奥ゆかしい感じである。「こうしてばかりは、続けられそうにない」とお思いになるにつけても、「まことにあつさり変わつてしまふ心だな。やはり、恋心になつてまふ男女の仲なのだ」と思つていらつしやうた。

「第三段 薫、匂宮について語る」

「匂宮が、たいそう不思議とお恨みになることがございましたね。しみじみとしたご遺言を一言承りましたことなどを、何かのついでに、ちらつとお洩らし申し上げたことがあつたのでしようか。またとてもよく氣の回るお方で、推量なさつたのでしようか、わたしに、うまく申し上げてくれるようにと頼むのに、冷淡な様子なのは、うまくお取り持ち申さないからだと、度々お恨みになるので、心外なことは存じますが、山里への案内役は、きつぱりとお断り申し上げることもできかねるのですが、なにも、そのようにおあしらい申し上げなさいませぬ。

好色でいらつしやるように、人はお噂申し上げているようですが、心の奥は不思議なほど深くいらつしやる宮です。軽い冗談などをおつしやる女たちで、軽はずみに靡きやすいという人などを、珍しくない女として軽蔑なさるのだから、と聞くこともございます。どのようなことも成り行きにまかせて、我を張ることもなく、穏やかな人こそが、ただ世間の習わしに従つて、どうなるもこうなるも適当に我慢し、少し思いと違つたことがあつても、仕方のないことだ、そういうものだ、などと諦めるようです。で、かえつて長く添い遂げるような例もあります。

壊れ始めては、龍田川が濁る名を汚し、言いようもなくすつかり破綻してしまふようなことなども、あるようです。心から深く愛着を覚えていらつしやるらしいご性分にかない、特に御意に背くようなことが多くありで、ない方には、全然、軽々しく、始めと終わりが違ふような態度などを、お

見せなさらぬご性格です。

誰も存じ上げていないことを、とてもよく存じておりますから、もし似つかわしく、ご縁をとお考になつたら、その取りなしなどは、できる限りのお骨折りを致しましょう。京と宇治との間を奔走して、脚の痛くなるまで尽力しましょう。」

と、実に真面目に、おつしやり続けなさるので、「ご自身のことはお考えにもならず、妹君の親代わりになつて返事しよう」とご思案なさるが、やはりお答えすべき言葉も出ない氣がして、

「何と申し上げてよいものでしょうか。いかにもご執着のようにおつしやり続けるので、かえつてどのようにお答えしてよいか存じませぬ。」

と、ほほ笑みなさるのが、おつとりとしている一方で、その感じが好ましく聞こえる。

「第四段 薫と大君、和歌を詠み交す」

「必ずしも自身のこととしてお考えになることも存じませぬ。それは、雪を踏み分けて参つた氣持ちぐらゐは、ご理解下さる姉君としてのお考えでいらつしやうて下さい。あの宮のご關心は、また別な方のほうにあるようでございます。わずかに文をお取り交わしなさることもございましたが、さあ、それも他人にはどちらかと判断申し上げにくいことです。お返事などは、どちらの方が差し上げなさるのですか。」

とお尋ね申し上げるので、よくまあ、冗談にも差し上げなくてよかつたことよ。何ということはないが、このようにおつしやるにつけても、どんなに恥ずかしく胸が痛んだことだろう」と思つと、お返事もおできになれない。

「雪の深い山の懸け橋は、あなた以外に、誰も踏み分けて訪れる人はございません。」

と書いて、差し出しなさると、

「お言い訳をなさるので、かえつて疑いの氣持ちが起こります」と言つて、氷に閉ざされて馬が踏み砕いて歩む山川を、宮の案内がてら、まずはわたしが渡りましょう。そうなつたら、わたしが訪ねた効も、あるというもの

でしょう」

と申し上げなされると、意外な懸念に、嫌な気がして、特にお答えなさらない。きわだって、よそよそしい様子にはお見えにならないが、今風の若い人たちのように、優美にも振る舞わずに、まことに好ましく、おおらかな気立てなのだろうと、推察されなされるご様子の方である。

こうあつてこそは、理想的だと、期待する気持ちに違わない気がなさる。何かにつけて、懸想心を態度にお現しになるのに対しても、気づかないふりばかりをなさるので、気恥ずかしくて、昔の話などを、真面目くさつて申し上げなされる。

「第五段 薫、人びとを励まして帰京」

「すっかり暮れてしまつと、雪がますます空まで塞いでしまひそうでございます」

と、お供の人びとが促すので、お帰りになるつとして、

「おいたわしく見回されるお住まいの様子ですね。ただ山里のようにたいそう静かな所で、人の行き来もなくございますのを、もしそのようにお考え下さるなら、どんなに嬉しいことでございます」

などとおつしやるのにつけても、「とてもおめでたいことだわ」と、小耳にはさんで、ほほ笑んでいる女房連中がいるのを、中の宮は、「とても見苦しい、どうしてそのようなことができようか」とお思いでいらつしやうた。

御果物を風流なふうに盛つて差し上げ、お供の人びとにも、肴など体裁よく添えて、酒をお勧めさせなされるのであつた。あの殿の移り香を騒がれた宿直人は、鬢鬚とかいう顔つきが、気に入くないが、「頼りない家来だな」と御覧になつて、召し出した。

「どうだね。おたくなりになつてからは、心細いだらうな」
などとお尋ねになる。ベそをかきながら、弱そうに泣く。

「世の中に頼る身寄りもございませぬ身の上なので、お一方様のお蔭にすがつて、三十数年過ごしてまいりましたので、今はもう、野山にさすらつても、どのような木を頼りにしたらよいのでしようか」

と申し上げて、ますますみつともない様子である。

生前お使いになつていたお部屋を開けさせなされると、塵がたいそう積もつ

て、仏像だけが花の飾りが以前と変わらず、勤行なさつたと見えるお床などを取り外して、片づけてあつた。本願を遂げた時にはと、お約束申し上げたことなどを思い出して、

「立ち寄るべき蔭とお頼りしていた椎の本は、空しい床になつてしまつたな」といつて、柱に寄り掛かつていらつしやるのも、若い女房たちは、覗いてお誉め申し上げる。

日が暮れてしまつたので、近い所々に、御莊園などに仕えている人びとに、み秣を取りにやつたのを、主人もご存知なかつたが、田舎びた人びとは、大勢引き連れて参つたのを、「妙に、体裁の悪いことだな」と御覧になるが、老女に用事で来たかのようにごまかしなかつた。いつもこのようにお仕えるように、お命じおきになつてお帰りになつた。

第五章 宇治の姉妹の物語 匂宮、薫らとの恋物語始まる

「第一段 新年、阿闍梨、姫君たちに山草を贈る」

年が変わつたので、空の様子がうららかなになつて、汀の水が一面に解けているのを、不思議な気持ちで眺めていらつしやる。聖の僧坊から、「雪の消え間で摘んだものでございます」といつて、沢の芹や、蕨などを差し上げた。精進のお膳にして差し上げる。

場所柄によつて、「このような草木の有様に従つて、行き交う月日の節目も見えるのは、興味深いことです」

などと、人びとが言つたのを、「何の興味深いことがあるうか」とお聞きになつている。

「父宮が摘んでくださった峰の蕨でしたら、これを春が来たしるしだと知られましよう」

「雪の深い汀の小芹も誰のために摘んで楽しみましょうか。親のないわたしたちですのう」

などと、とりとめのないことを語り合いながら、日をお暮らしになる。

中納言殿からも宮からも、折々の機会を外さずお見舞い申し上げなさる。厄介で何でもないことが多いようなので、例によって、書き漏らしたようである。

「第二段 花盛りの頃、匂宮、中の君と和歌を贈答」

花盛りのころ、宮は「かざし」の和歌を思い出して、その時お供で「一緒した公達なども、

「実に趣のあった親王のお住まいを、再び見ないことになりました」

などと、世の中一般のはかなさを口々に申し上げるので、たいそう興味深くお思いになるのであった。

「この前は、事のついでに眺めたあなたの桜を、今年の春は霞を隔てず手折つてかざしたい」

と、気持ちのままおっしゃるのであった。「とんでもないことだわ」と御覧になりながら、とても所在ない折なので、素晴らしいお手紙の、表面だけでも無にすまいと思って、

「どこと尋ねて手折るのでしよう。墨染に霞み籠めているわたしの桜を」

やはり、このように突き放して、素っ気ないお気持ちばかりが見えるので、ほんとうに恨めしいとお思い続けていらっしやる。

「第三段 その後の匂宮と薫」

お胸に抑えきれなくなつて、ただ中納言を、あれやこれやお責め申し上げなさるので、おもしろいと思いつながら、いかにも誰憚らない後見役の顔をしてお返事申し上げて、好色っぽいお心が表れたりする時々には、

「どつしてか、このよつなお心では」

など、お咎め申し上げなさるので、宮もお気をつけなさるのであろう。

「気に入った相手が、まだ見つからない間のことです」とおっしゃる。

大殿の六の君をお気につけないことは、何となく恨めしそくに、大臣もお思いになつていたのであった。けれど、

「珍しくない間柄の仲でも、大臣が仰々しく厄介で、どのような浮気事でも咎められそうなのがうつつしくして」

と、内々ではおっしゃって、嫌がっていらっしやる。

その年、三条宮が焼けて、入道宮も、六条院にお移りになり、何かと騒々しい事に紛れて、宇治の辺りを久しくご訪問申し上げなさらない。生真面目な方のご性格には、また普通の人と違っていたので、たいそうのんびりと、自分の物と期待しながらも、女の心が打ち解けないうちは、不謹慎な無体な振る舞いはしまい」と思いながら、故宮とのお約束を忘れていないことを、深く知っていたきたい」とお思いになっている。

「第四段 夏、薫、宇治を訪問」

その年は、例年よりも暑さを人がこぼすので、川辺が涼しいだろうよ」と思い出して、急に参上なさつた。朝の涼しいうちにご出発になつたので、折悪く差し込んでくる日の光も眩しくて、宮が生前おいになつた西の廂の間に、宿直人を召し出してお控えになる。

そちらの母屋の仏像の御前に、姫君たちがいらっしやつたが、近すぎないようにと、ご自分のお部屋にお渡りになるご様子、音を立てないようにしていたが、自然と、お動きになるのが近くに聞こえたので、じつとしていられず、こちらに通じている障子の端の方に、掛金がしてある所に、穴が少し開いているのを見知っていたので、外に立ててある屏風を押しやつて御覧になる。

こちらに几帳を立て添えてある、ああ、残念な」と思って、引き返す、ちよつどその時、風が簾をたいそう高く吹き上げるようなので、

「丸見えになつたら大変です。その御几帳を押し出して」

という女房がいるようである。愚かなことをするようだが、嬉しくて御覧になると、高いのも低いのも、几帳を二間の簾の方に押し寄せて、この障子の正面の、開いている障子から、あちらに行こうとしているところなのであった。

まず、一人が立つて出て来て、几帳から覗いて、このお供の人びとが、あちこち行ったり来たりして、涼んでいるのを御覧になるのであった。濃い鈍色の単衣に、萱草の袴が引き立っていて、かえって様子が違って華やかである見えるのは、着ていらつしやる人のせいのようである。

帯を形ばかり懸けて、数珠を隠して持つていらつしやうた。たいそうすらりとした、姿態の美しい人で、髪が、袷に少し足りないくらいだろうと見えて、未まで一筋の乱れもなく、つやつやとたくさんあって、可憐な風情である。横顔などは、実にかわいらしげに見えて、色つやがよく、物やわらかにおっとりとした感じは、女一の宮も、このようにいらつしやるだろうと、ちらつと拝見したことも思い比べられて、嘆息を漏らされる。

もう一人がいざり出て、あの障子は、丸見えではないかしら」と、こちらを御覧になつてゐる心づかいは、気を許さない様子で、嗜みがあると思われる。頭の恰好や、髪の場合は、前の人よりも少し上品で優美さが勝つてゐる。

「あちらに屏風を添えて立ててございました。すぐにも、お覗きなされるまい」と、若い女房たちは、何気なしに言う者もいる。

「大変なことですよ」

と言つて、不安そうにいざつてお入りなるととき、気高く奥ゆかしい感じが加わつて見える。黒い袷を一襲、同じような色合いを着ていらつしやるが、これはやさしく優美で、しみじみと、おいたわしく思われる。

髪は、さっぱりした程度に抜け落ちてゐるのであるう、末の方が少し細くなつて、見事な色とも言うのか、翡翠のようなどとも美しそつで、より糸を垂らしたようである。紫の紙に書いてあるお経を片手に持つていらつしやる手つきが、前の人よりほつそりとして、痩せ過ぎているのであるう。立つていた姫君も、障子口に座つて、何であろうか、こちらを見て笑つていらつしやるのが、とても愛嬌がある。